

短歌の部選評

歌人

田中 章義

今年はずっと賞の数を増やし、さらに多彩な作品を紹介したい——心からそう思いました。入賞作以外にも注目作が沢山ありました。

まずは新型コロナウイルスの感染拡大を経て詠んだ作品。「今はまだ先の見えない暗闇に必死で戦う白衣の英雄」（石原創太）、「なくなつた全国目指したインターハイ でも三年間に後悔はない」（山本悠月）、「次々と中止になっていくコンサート コロナが代わりにワールドツアー」（北澤杏奈）、「日常のささいなことのありがたみ気づかせてくれたコロナウイルス」（相川紗楽）、「いつもなら君としていたはんぶんこ今気がついた美味しさのカギ」（井本花音）。

その他の題材では、「永遠に軌道に乗って廻っても届くことないあなたの惑星」と詠む京都聖母学院の近藤萌さん、「あ、アイツの背中を押すというよりも腹をひっぱるようなエールを」と詠む熊本高校の倉岡皇至さん、「朽ち果てて迷彩模様の蔓の間にトマト一粒自己主張する」と詠む桐朋高校の小俣卓紀さん、「駐輪場笑い声響くさよならを引き延ばすため日焼け止め塗る」と詠む阿波高校の渡辺あみさん、「ビル街にポツリと生きる大樹よ仲間探すため根を延ばすのか」と詠む開成高校の中根大宝さんなど、個人応募の人たちにも才能豊かな人が沢山いま

した。

部活動を詠んだ作品にも注目作がありました。「今日も空手明日も空手と明け暮れて汗の玉落つ魂（たま）の汗かく」（高島光希）、「体育館静けさの中ドリブルの音鳴り響く朝七時半」（竹内里加子）、「汗流し月の明かりが映えるころ聖地目指してバット振り出す」（菅原一斗）、「酷暑でも砂ぼこり舞うグラウンド走り続けるただひたすらに」（柳井優輝）などの歌。切実な思いを詠んだ、「帰ってきてたたいまがない戻りたい二人を止めたい離婚しないで」（ソーヤチャ・ミジャル）など、多彩な国籍の人の歌にも着目しました。「プスが死ぬうざい消えろとみんな言うあいつは何も悪くないのに」（笠井紫恩）、さらにはLGBTの思いを詠んだ、「寒いバス結露の窓に文字を書く友達の名と相々傘と」（成田実希子）、「雨が降ってビニール傘を買って差す彼といっしょに入れるサイズの」（駒形圭吾）などの作品も多くの人に伝えたいと思いました。他にも、「名も知らぬ植木の花が出す香りいつもの道も新しい道」（日野希美）、「仕事終えウトウト眠る母の横山積みされた洋服たたむ」（服部妃奈子）、「弱くても背中を向けず立ち向かう逃げない強さ手に入れたくて」（松尾李伎）、「敗戦日戦地に散った曾祖父の遺影を下ろし祖母は語りき」（田中大翔）、「【ファイトです】その一言で頑張れる言葉は人を動かせるんだ」（守谷なつ海）、「一歩先歩いてこちらを振り返るファシヤープみたいなあなたの仕草」（青木はるか）、「ラブコメの生徒Bにも価値がある僕の居場所はどこにあ

るかな」（山田颯一郎）、「ふるさとを離れる兄を見送って母はしずかにハンカチ畳む」（水流愛乃）、「独立の音を奏でる木の葉でも木陰に立てば調和の旋律」（林奈緒子）、「見も知らぬドルチェ&ガッバーナの香りを想う高一の夏」（佐藤佳凜）、「誕生日たった一日の君の日を誰より私が祝いたいんだ」（高橋李旺）などの作品も印象的でした。他の誰とも違う、自分だからこそこの歌をこれからもずっと詠み続けてほしいと思います。入賞者の皆さんもここがゴールではなく、ここはきつと新たなスタートラインです。

●田中 章義（たなか あきよし）

昭和四十五年静岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。大学一年生のとき第36回角川短歌賞を受賞。以後、「地球版・奥の細道」づくりをめざし世界を旅しながら、ルポルタージュ、紀行文、絵本など多数執筆。世界で詠んだ短歌が英訳され、平成13年国連WAFUNIFF親善大使に就任。JICA「21世紀のボランティア事業を考える会」検討委員、国連環境計画・地球環境平和財団「地球の森プロジェクト」推進委員長、ワールドユースピースサミット平和大使などを歴任。短歌集の他、絵本や人物ルポルタージュなどの著述もあり、松井秀喜選手や北島康介選手の社会貢献活動を紹介した単行本も執筆。BEGINなどミュージシャンの歌詞も手掛けている。